

令和6年3月1日（毎月1回1日）発行

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

2024

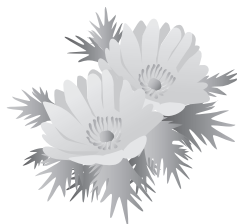
No. 904



3 March

みちしるべ

MICHISHIRUBE



Contents

神が許されないこと／天谷友彦.....	3
借り物の命／常石真則.....	4
著名人と聖書 第9回 コーリー・テン・ブーム／古賀敬太.....	8
イエス・キリストの祈り／五十嵐信生.....	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

神が許されないこと

天谷友彦



「以上の事情を考慮して刑法の条文を適用すると、被告人を懲役〇年に処するのが相当と考えます。」

裁判において、刑罰を裁判所に求めることを求刑といいますが、検察官による求刑は、おおよそこのような決まり文句となっています。

ところで私たちが、刑法の条文ではなく、聖書によってさばかれるとしたらどうでしょうか？ 正しい神から見れば、すべての人が罪人であり、なおかつ、その罪は死に値するものです。

聖書は次のように語ります。

「罪の報酬は死です。」(ローマ人への手紙6章23節)
「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、・・・」(同3章23節)

ですから、この聖書の聖句を適用すると、私たちに對する求刑は「〇〇〇〇(あなたや私)を死刑に

処するのが相当と考えます。」となることでしょう。

職務上、検察官は犯罪を見逃すことはできませんが、神も罪を見逃すことはできません。しかし神にはもつとできないことがあります。それは罪のさばきによって、あなたを永遠に失うことです。神は、それだけは絶対に許さないと思っておられるのです。実は、先の聖書のことばには続きがあります。

「・・・神の恵みにより、キリスト・イエスによる^{あがな}贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」

(同3章24節)

この箇所を読むと、この聖句自体は、私たちを断罪するものではないことがわかります。神は、あなたを失うことを許さない一方で、あなたの罪の身代わりに、神のひとり子イエスが十字架で血を流して死ぬことは許されたのです。それほどまでにして、神はあなたを罪から救いたいのです。

神は、罪人を拒絶するのではなく、むしろ抱き寄せようとおられます。そのために必要なすべての準備が、すでに神によって整えられています。次は、あなたがその救いを受け取る番です。

借り物の命

常石 真則

私は賃貸物件（アパート・マンション・戸建て）の管理をする仕事をしています。何年か前の話ですが、ある入居者の方から、アパートを退去する時に発生する費用についての相談を受け、そのアパートを訪問したことがあります。その方によると、生活の中で発生した傷や汚れなどについて、どの程度まで自分たちが費用負担をしなければならぬかを、具体的に説明してほしいとのことでした。

私はそのようなケースについて一通り説明しましたが、最後に「退去の時のことを意識しながら生活して頂いていれば、多少ご負担して頂くことがあったとしても、大きな金額になることはないのでご安心ください」とお伝えして帰りました。

私はこの件をとおして、聖書が私たちに語っていることも、似ている部分があると感じました。賃貸物件に住んでいる人たちは、部屋を借りている間は自分の家として生活していますが、それはあくまでも他人の物を賃料を払って使わせてもらっているだけであり、退去する時には返さなければなりません。

それと同じように、私たちも人生を終えた時、私たちに命をお与えになり、私たちが自分の意志で命を使うことを許された神様の前に立つ時がやって来ます。



「土のちり（肉体）は元あったように地に帰り、霊（たましい）はこれを与えた神に帰る。」

（伝道者の書12章7節）

私たちも死んだ後で私たちに命を与えて（貸して）くださっている神様の前に立たなければなりません。

私たちは「自分の命は自分の物だ」と考えがちですが、はたして本当にそうでしょうか？

もしあなたが自分の意志で自分の命を自分で作り、毎日、心臓やその他のあらゆる臓器などをあなた自身の力で動かし続け、そして人生を終えなくなる時まで、自分の命が正常に保つことができるのであれば、あなたの命はあなた自身の物であると言えるかもしれません。

しかし実際は、私たちの命は神様によって私たちに与えられ、私たちの命は神様によって正常に保たれ続けています。

そして私たちの命は、私たちがどんなに「まだもう少し生きていたい」と願ったとしても、神様が「あなたの命をわたしに返さない」と命じられた日には返さなければなりません。なぜなら私の命やあなたの命は私やあなたの物ではなく、神様の物だからです。ですから私たちの命は「借り物の命」と言うことができるでしょう。

賃貸物件の話に戻りますが、賃貸物件を契約する場合、おそらくどの賃貸借契約書にも次のような文面が記載されているかと思います。

「入居者は善管注意義務をもって本物件を使用すること」

「善管注意義務違反による損害は入居者が費用負担する」

この「善管注意義務」とは、「善良なる管理者としての注意義務」の略語で、簡単に言うと「他人の物

を借りているわけだから自分の物以上に大切に使う（管理する）ように注意してください」という意味です。

また賃貸借契約書には、「指定用途」という欄があります。そこには「居住用」とか「事務所」、「店舗」などと記載されていて、「上記の目的以外に使用しないものとする」という文面も書かれているかと思いますが。もし「居住用」と書かれている場合は、それを生活のためにのみ使用し、お店や事務所として使ってはダメ、ということです。賃貸物件を借りている人は、貸した人の希望する使用方法に従って部屋を使わなければなりません。

同じように、私たちの命も私たち自身の物ではなく神様の物だとすれば、私たちは自分の命を神様の物として大切に扱う必要があります。そしてまた神様が私たちに命を貸してくださった目的に従って、私たちの命を使う必要があるのです。

それでは神様は、私たちの人生にどのような目的を持っておられるのでしょうか？ どのような生き方をしてほしいと願っておられるのでしょうか？

聖書にはこのように書かれています。

「主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、主があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

（三力書6章8節）

公正を求めることや、誠実に生きることが人として大切であることは言うまでもありません。しかしそれだけでは不十分だと聖書は語ります。一番大切なことは私たちに命を与えてくださり、私たちの日々を守ってくださっている神様を「あなたの神」と認めて、このお方とともに生きる人生を送ること



です。それこそ神様が私たちに望んでおられる「命の使い方」なのです。

冒頭の入居者様とお話をした時、私は「この人はとても賢い人だ」と思いました。なぜなら、やがてアパートを退去する時が来て、退去精算の話をする時が来るということをよく理解していたからです。

しかしもっと大切なことは「私たちに命を貸してくださっている神様と立ち会う時が必ず来る」ということをよく理解して、その時のために備えをすることです。

聖書は次のように警告しています。

「あなたの神に会う備えをせよ。」（アモス書4章12節）

賃貸物件の入居者様が、入居中きれいに部屋を使用してくださっていると、円満な形で賃貸借契約を終了することができます。残念ながら気がつけずに生活されていたため、修繕にたくさんの費用が発生して後味の悪い形で退去された方々もいらつしました。

私たちの「命の賃貸借契約」も必ず終わりを迎えます。あなたは、あなたがこの世を去って神様と立ち会う時、神様が喜んであなたを迎えることができる命の使い方をしておられるでしょうか？

「神に会う備え」とは「イエス・キリストをあなたの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた、神様が遣わされた救い主である」と信じることです。どうぞ、あなたに命を貸してくださいといる神様に目を向け、このお方に会う備えをされますようにお勧めいたします。

著名人と聖書（第9回）

古賀敬太

コーリー・テン・ブーム（1892—1983）



—ユダヤ人を救った人—

隠れ家

コーリー・テン・ブームは、『わたしの隠れ場』の著書です。ユダヤ人の隠れ家といえば、アンネ・フランクが有名です。私も家内と一緒にアムステルダムを訪れ、アンネの隠れ家を見て、当時の状況を想像することができました。今回紹介するのは、そうしたアンネと同じ境遇のユダヤ人を、ナチスの迫

害から救おうとして捕まえられ、強制収容所に送られたオランダ人のコーリー・テン・ブーム一家の記録です。

コーリーとベッツィー

ナチス・ドイツが1940年オランダに侵攻し、ユダヤ人迫害を開始します。コーリー（コルネリア）の父はオランダのハールレムの時計屋ですが、コーリーと姉のベッツィーと共にユダヤ人をナチスの迫害から匿^{かくま}い、彼らの家が、ユダヤ人の「隠れ場」

となります。しかし、その隠れ家は、1944年2月28日にゲシュタポによって発見され、コーリーとベッツィーの姉妹、そして父親は、一旦ハーゲン近郊のシュペニンゲン州刑務所に収容され、父親は10日後になくなります。当時コーリーとベッツィーは50歳の独身の女性で、ここからブクト収容所を経てベルリン近郊のラベンスブルックの女囚絶滅収容所に移送されます。

この収容所に入る時に一切の持ち物が剥奪されますが、幸いなことにコーリーは、聖書を隠し持って監視員の間を通り抜けることができました。この聖書の言葉によって、コーリーとベッツィーは、収容所の苦難の中で希望を失わずに生き抜くことができました。

絶滅収容所で語られる聖書のことば

収容所ではコーリーとベッツィーの周りに囚人が集まり、苦しみ絶望している人々に聖書の言葉が語られました。実は収容所内では聖書の話をするこ

とは禁じられており、規則を破ると厳しい刑が科せられました。収容所内はノミやシラミが多く不潔だったので看守たちは近寄ろうとはしませんでした。ベッツィーが開いた聖書の箇所は、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネの福音書3章16節)という有名な聖句です。ベッツィーは、どんなに深い地獄のような深い穴の中にも、神の愛は注がれると語ります。それはどんなに闇が深くても、光は闇を照らすことができるという確信です。

多くの囚人はこのような地獄のような収容所に神がおられるはずがないと思っていましたが、ベッツィーは、ここにも、否ここにこそ神はおられると確信していました。彼女は、苦難に打ち勝つ秘訣としてローマ書8章を読みました。この言葉が読まれた時に、周りに集まっている囚人に希望の光が灯されました。

「だが、私たちをキリストの愛から引き離すの

ですか。苦難ですか、悩みですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。しかし、これらすべてにおいても、私たちは私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」（ローマ書人への手紙8章35、37節）

ベツツイーとコーリーを中心とした交わりは、まさに生き地獄における天国への門となっていくます。

「ベツツイーとわたしは肩を並べて、神の遣わされたノミのいる聖所で、神のことばをもって部屋中の人全員に仕えました。私たちが死の床のそばにすわると、そこは天国の門となりました。私たちは、なにもかも失った婦人たちが、希望に輝き精神的に



豊かになっていくのを見ました。二人が入れられている第二十八号棟は、ラベンズブルックにおける祈りの心臓部になりました。私たちは、収容所の全員のためにベツツイーの勧めによって、囚人だけではなく、看守のためにも、とりなしの祈りを捧げました。」（『わたしの隠れ場』より）

収容所で苦しんでいる同じ囚人のために祈ることはわかりますが、自たちを苦しめ、虐待する看守のために祈ることは普通では考えられないことです。コーリーでさえも、強い抵抗感がありました。しかし、ベツツイーにとって、心が憎しみと敵意で支配されている看守たちこそ、救われなければならない哀れな罪人だったのです。

身体の弱いベツツイーは、強制収容所で安らかに天に召されていきました。他方、コーリーは、1944年12月に奇跡的にラベンズブルック強制収容所から解放されます。彼女が出所して一週間後に、彼女の年配の婦人たちは全員ガス室に連れていかれたそうです。彼女が収容所から出る時の言葉が印象的です。

「神の御子、イエス様はわたしたちの罪を取り除くために、この世に來られたのです。そして十字架の上で死なれ、死人の中からよみがえられて、私たちと一緒にいると約束してくださいました。わたしの姉はここで死にました。姉はとても苦しみました。私も苦しみました。でもイエス様は私たちと一緒にいらつしやるのです。わたしの敵に対する憎しみと恨みを奇跡のように、取り除いてくださったのです。イエス様は私たちのころのなかに、聖靈によって神の愛を注いでくださるのです。」

真の隠れ場

コーリー・テン・ブームは、自分の収容所経験を基にして、『わたしの隠れ場』を書きました。コーリーにとって「隠れ場」とは一体何だったのでしょうか。コーリーたちが用意したユダヤ人のための隠れ場は結局は発見され、ゲシュタポによって破壊されてしまいました。しかし、何者にも破壊されず、侵害されない「隠れ場」、絶滅収容所中で唯一逃れ

ることのできる所、それは、コーリーにとってイエス・キリストそのものでした。ナホムという預言者は、「主(神)はいつくしみ深く、苦難の日の咎。ご自分に身を避ける者を知っていてくださる。」(ナホム書1章7節)と書いています。

解放後のコーリー

コーリーは、解放されてから神の愛の証人として、53歳から32年間、実に60カ国を訪問しています。コーリーは、自分が解放されたのは、キリストの愛を多くの人々に伝えるためであると確信し、全身全力で全世界を駆け巡り、キリストの愛を伝えました。私たちの人生には様々な苦難があります。その苦難からの「隠れ場」を揺り動かされることのないイエス・キリストに求めてください。

【参考文献】

コーリー・テン・ブーム『わたしの隠れ場』

(いのちのことば社 1975年)

イエス・キリストの祈り

五十嵐信生



「何を見張るよりも、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれから湧く。」（箴言4章23節）

私たちが日常的に自分の心を意識して見守っていると、私たちは自分の心の中がいかに汚れているかに気付くのではないかと思います。

通勤時間帯は電車が混雑しており、ドア付近で立っていると多くの方々が乗車してきて押し潰されそうになることがあります。そういうときに「満員

なのにどうしてまだ乗ろうとするのだろうか」と人を裁くような思いを持ってしまう。

また、車を運転していると、青信号になっても前の車が進んでくれないことがあります。それが急いでいるときですとイライラしてしまいます。

このように、自分の心を意識的に見てみると、私の場合は自己中心的な思いや醜い思いで満ちていることに気付かされます。

海の水はとても透き通って見えることがあります。しかし、かき回されると下に沈んでいる砂ですぐに濁ります。

私たちも心に余裕があるときは周りの人の事を気遣ったり、海の水が透き通っているように自分の心も澄んでいるのだと思うかもしれません。しかし、何か悪いことが起きたり、困難な状況に遭遇するとどうでしょうか？ 海の水が砂で濁るように私たちの心も汚い思いでいっぱいになったり、それが口から漏れたりするのではないのでしょうか？

イエス・キリスト（以下イエス様）が、十字架で死なれたことは、歴史上の出来事としてご存知の方が多いかと思えます。

イエス様は十字架刑という最も残酷な刑の中でもその心の中は敵対する人々を思いやる方でありました。それは純粹な愛の心でした。この方の心はかき回されても良いものしか出てきませんでした。

その十字架がどういう様子だったのか、イエス様

はどういう御方かということまでは、よくご存じない方が多いのではないのでしょうか。

そこでイエス様の十字架の一場面を通して、この方の事をご紹介します。

『ほかに二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。

『どくろ』と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。

そのとき、イエスはこう言われた。

『父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。』

彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。民衆は立って眺めていた。議員たちもあざ笑って言った。

『あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。』

（ルカの福音書23章32〜35節）

この箇所は、ちょうどイエス様が十字架につけられた場面です。十字架刑は裸にされ、太い釘を両手両足に刺され、木に吊されます。そればかりかイエス様は十字架にかかる前に鞭で打たれ、拳で殴られ痛めつけられました。

イエス様はひどい痛みに耐えながら、人々からの罵りの言葉を浴びられました。そのような状況の中で、イエス様は自分を十字架につけた者たちやあざける者たちのために、彼らの罪が赦されるよう祈られたのです。

「父よ、彼らをお赦しください」という祈りには、イエス様の心が表れています。それは純粋な愛の心でした。

もし、私たちが同じ立場であるなら、どうでしょうか？ ひどい痛みや恥の中で、自分を肉体的にも精神的にも痛みつける者に対して、その者が赦されるように、その者が幸せになるように願えるでしょうか。私であれば決してできません。しかし十字架での苦しみの中でも愛を表わされたイエス様は、本

当に正しい方でした。そのことはイエス様の十字架の傍らにいたローマの百人隊長も証言しています。（ルカの福音書23章47節）

ではなぜ悪いことをしていないイエス様が、十字架にかかられたのでしょうか？ イエス様の弟子であり、約3年間、行動をとともにしたペテロは次のように書いています。

「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。

キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」（ペテロの手紙第一・2章22〜24節）

それは、私たちの罪の身代わりのためだったのです。

私たちは、生まれながらに自己中心的で、心の中

は濁っており、人に見せることができないのではないでしようか？そして、その汚れは自分の努力やお金によっても他人によっても改善することはできません。

しかし唯一、私たちのその罪を解決できる道があるのです。それは、イエス様が私たちすべての者の罪のために十字架にかかれ、私たちが受けるべきさばきを受けてくださったという事実を、そのまま信じ受け入れることです。

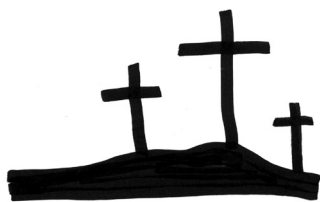
十字架上のイエス様の祈りは、こう捉えることができると思います。

「たとえ彼ら（私を含む読者の方々）に罪の自覚がなくとも、その罪をわたしが負っていますから、どうか彼らをさばかないでください」と。

イエス様はその正しさと愛のゆえに、私たちすべての人間の罪を負うことができたのです。そうすることによって、神様は私たちの罪をすべて赦してくださり、イエス様に在って私たちを受け入れてくださるのです。そのような人には、永遠のいのち

が与えられ、天国における祝福を受けることができます。

どうぞ皆さんが、自らの罪に気づいて、その罪を背負って死んでくださったイエス様について、さらに
お知りになれますように。



みちしるべ3月号 第904号

令和6年3月1日（毎月1回1日）発行

発行所 伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9
TEL 042-366-7760
FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部
<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>
印刷所 株式会社 共同印刷所

昭和43年1月10日第3種郵便物認可

令和6年3月1日(毎月1回1日)発行

みちしるべ3月号 第904号

伝道出版社
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9



定価1部50円+税
送料63円
振替00140-927336

Column



パスポート

海外へ行きたい時、私たちはパスポートが必要です。パスポートは海外でも使える身分証明書であり、渡航先の国での安全の保障や、国際移動の管理に使われています。

先日私は役所へ行き、パスポート作成の手続きをしました。手続きには、本籍地の証明書や、証明写真、また、受け取り時には手続き手数料が必要で、結構手間がかかる作業でした。海外へ行くには、他にも渡航のための飛行機や船のチケット、滞在先のホテルの手配などやるのが沢山あります。お金も必要です。

一方、聖書には天国に行くための方法が記されていますが、それはとても簡単です。キリスト・イエスが救い主であり、私たちのために死なれたことを信じるだけで良いのです。

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒の働き16章31節)

天国は、そこへ入るための手続きや準備、お金も必要ありません。神様が全てを用意されており、あと必要なのは、それを得るための私たち自身の意志(信仰)だけなのです。神様はすべての人が天国に入ることを望んでおられます。そこに入るために、ぜひ「イエス・キリストの救い」というパスポートを手に入れてください。(白井達也)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。